

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 森 和 子

論 文 題 目

養子縁組による血縁によらない親子関係形成過程

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	平石賢二
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	河野莊子
名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授	狐塚貴博

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

本論文は、8組の養子縁組家庭に対する面接調査と質的研究法によって、養親と養子がそれぞれに特有の課題に直面しながら、どのような心理的プロセスを経て親子関係を形成していくのかについて明らかにしている。養親に関しては、不妊治療の経験を経て、養親になる意思決定過程と、養親になってから子どもの思春期の試し行動に葛藤し、それを乗り越えて、最終的に子どもを受容していく過程を明らかにしている。また、養子に関しては、養子であることの真実告知からルーツ探しを経ながらアイデンティティ形成を行っていく過程の分析を行っている。また、養親、養子のペアデータにより、両者の過去の回想を分析し、両者の認識の比較を行った。

本論文は、5章で構成されている。

第1章では文献研究を行い、本研究の背景にある社会的養護の実態と、社会的養護における受け皿としての施設養護、里親制度・養子縁組による家庭養護について概観している。また、普通養子縁組と本研究での研究対象となる特別養子縁組の違いを確認し、さらに特別養子縁組を希望する養親の多くが不妊治療を経て養子縁組をしていることの実態と問題点を整理している。そして、血縁によらない親子関係に関する先行研究の動向として、①不調により解消可能な親子関係、②真実告知、③ルーツ探し、④養子のアイデンティティ、に関するレビューを行い、最後に本論文における目的と方法を示した。

第2章では、養親が「親になる」経験に焦点を当てた2つの面接調査の結果が示されている。研究1では、不妊治療を経て養子縁組によって血縁によらない「親になる」までの養父母の意思決定要因を検討した。結果として、①夫婦関係の洗い直しと理解し合意する努力、②血縁による子どもを持たない人生の受容と養（里）親という選択、③社会文化的差別圧力を乗り越える、④非血縁でも血縁の子どもと同等の愛情、⑤養（里）子のいることのプラス面の認識という5つの意思決定段階を見出した。続いて、研究2では一人の養母に対する面接調査で得られた語りのデータを複線経路・等至性モデル（TEM）と三層モデル（TLMG）によって分析し、養母の子どものありのままを受容し、ルーツ探しをサポートするまでの詳細な心理的変容プロセスが明らかにされている。

第3章では、養親を対象にした面接調査と養親が書いた日記の分析に基づいて、養子の成長と親子関係再構築の過程が検討されている。研究3では4名の養母を対象にした面接調査を行っている。その結果、それぞれに特徴的なテーマは見られるものの、「最初の真実告知」から始まり、「生みの親、養親への理解」、「境遇の受容」に至るまでの養子の5つの成長過程が明らかにされた。また、研究4では、1組の養母と養子のやりとりを記録した養母の日記の分析を行っている。そして、養子には「最初の真実告知への適応」、「子どもの生まれについての学び」、「養子であることの意味の理解」、

別紙 1 - 2

「生みの親と自分のルーツの探求」, 「養子に関するスティグマへの対処」, 「喪失の不安に関することへの対処」という心理的課題があり, これらの適応課題を経て, 血縁によらない親子関係の再構築が達成されることを示した。

第 4 章の研究 5 では, 4 組の養親と成人した養子を対象にした面接調査および生活史を回想しライフラインで示すライフラインメソッドを実施し, その結果から, 養親が「親になる」ことと養子が養子縁組家庭での「子どもになる」ことの経験と認識について明らかにしている。そして, 養親と養子はそれぞれの思いがあるが, 子どもが思春期で示した試し行動に対して養親が非常に辛さを感じていたのに対して, 養子は辛いと感じていなかったなど, 親子の同時期での経験された感情は必ずしも一致していないことなどが示された。

第 5 章では, 第 1 章から第 4 章までの研究知見を整理し, ①「試し行動」を受け止めて血縁によらない「親になる」, ②「真実告知」から「ルーツ探し」へと続く養子のアイデンティティの形成, ③「運命の分かち合い」により「血縁を超えて親子になる」という 3 つの観点から養親と養子の血縁によらない親子関係形成過程を総括した。また, 最後に本研究の意義と臨床場面への示唆, 今後の課題が論じられた。

本論文の特色と学術的意義は, 以下の点である。

- ①日本では養子縁組の親子関係形成過程に関する心理学的研究はこれまでほとんど行われていない現状があり, 本論文はこのテーマにおける先駆的研究として位置づけることができること。
- ②研究協力者との信頼関係に基づいた 25 年以上の長期間にわたる縦断調査を行っており, 容易に得ることができない大変貴重な質的データを収集していること。
- ③養親が「血縁を超えて親になる」心理的変容プロセスについて, 近年, 注目されている質的データ分析方法である複線経路・等至性モデル (TEM) と発生の三層モデル (TLMG) を用いて分析し, 不妊の経験から始まり, 子どもが示す試し行動を乗り越えて, ありのままの子どもを受容するまでの複雑なプロセスおよび関与する要因について詳細に示したこと。
- ④養子の成長とアイデンティティ形成における真実告知とルーツ探しの意味について詳細な分析を行ったこと。
- ⑤養親と養子のペアデータの分析から, 親子関係形成過程の認識には大きな不一致が認められることを示したこと。
- ⑥これらの本論文における研究成果は, 養子縁組家庭にかかわる福祉領域, 教育領域, 医療領域等での臨床実践において重要な示唆を与えると考えられること。

別紙 1 - 2

以上の論文内容に対して、審査委員からは以下のような疑問点、問題点が指摘された。

- ①養子が思春期に示した問題行動を試し行動としてとらえているが、一般的な思春期の反抗や養子ではない子どもが示す問題行動とどのような点が異なるのか。血縁関係のある親子関係の問題との共通点はないのか。
- ②血縁を超えて親になるというのは、誰の視点なのか。何をもって親になったとするのかが分かりにくい。
- ③養子はどうしてルーツを知りたがるのか。人がルーツを知りたがることについての一般的な研究知見と関連づけて考察する必要はないか。

審査委員からのこれらの指摘に対し、博士学位申請者は研究の限界や課題について十分に認識しており、質疑に対する回答も的確であり妥当なものであった。また、これらの課題は今後の研究によって対処していくことが可能であると判断した。

以上の結果を総合し、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。